

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

(代表者 博田 英明 会員数 約60,000人)

T E L 03-3267-8583

1 前 文

本稿では、2022年度（令和4年度）大学入学共通テスト「英語（リーディング）」問題（追試験）の検討を行う。

昨年、大学入試センター試験「英語（筆記）」問題から大学入学共通テスト「英語（リーディング）」問題へ移行し、問題の形式上大きな変更があった。2年目となる共通テストでは、昨年と同様に過去の問題にあった発音問題や語順整序等の文法に関する問題がなくなり、英語リーディングの力を測る試験に変わった。この移行によりコミュニケーション重視の観点から英文の内容や場面設定に改善が進められ、新しい学習指導要領の趣旨をふまえた設定となった。

過去のセンター試験と比較して、出題された小問の数は減少したものの英語の総語数は1200語を超える増加があった。英語リーディングに特化した試験であるから当然のことかもしれないが、受験者にとってはこれまで以上に速読力が求められ、新傾向の問題も登場し、最後まで解き終えることができなかつた受験者がいたことが予想される。一律な英文の読み方をするのではなく、素材となる英文の種類や目的に応じて様々な読み方をするのが要求され、設問の趣旨に合った読み方をしなければ時間が不足する。速読と精読のバランスや効果測定の見点、特に思考力を測定する観点からするとこれ以上語数を増やすことは有効でないと考える。情報量が増え、問題も複雑になり、短い時間の中で単に注意力を測定するような試験に陥るのではなく、じっくりと考える時間を設定して思考力を十分に測るような試験問題に改善することが求められるのではないかと考える。しかし、一方で中間集計の結果、本試験の平均点が100点満点中ほぼ63点となり、ある意味、理想的な結果となっている。今後大問と小問ごとの正答率や弁別率、得点分布など更に詳しい分析結果の発表が待たれるところである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 情報とその内容の読み取りに関する設問である。問題数は5問、10点の配点で昨年と同じである。日常生活に関連したSNSやウェブサイトから必要とする情報を読み取り、その情報を基に解答を推測する力が求められる問題である。

A 今年の追試験の問題は昨年と同様にスマートフォンのメッセージのやり取りを通して、画面上のメッセージの内容について問う問題とメッセージに続く応答を推測させる問題であった。短い英文のやり取りから必要な情報を読み取り、適切な応答メッセージを返信する設定であり、思考力を測定する問題として優れた問題である。本試験も含めてしばらくはこの形式を継続していただきたい。なぜなら形式がほぼ一定に保たれることで、受験者に過度の不安を与えることを避けることができるからだ。

B 昨年と同様、ウェブサイトにある案内文（広告）から必要な情報を読み取り解答する問題で、一昨年まで実施されていたセンター試験の第4問Bに類似している。過去の問題は、設問が先に設定されていたので、実際の場面からすれば、やや違和感があると捉えられたこともあったが、共通テストでは設問が問題文の後に設定された形式に変化してそのようなこと

もなくなった。過去に出題されたこの形式の問題には、一見して文字が小さく行間も狭く複雑で分かりにくいものがあったが、その後改善が進み、文字の大きさや行間の幅などが改められ、一目でどこにどのような情報があるのかがすぐに分かるようになり、取り組みやすい問題となった。必要以上に情報を満載して、単に注意力を試すような問題にすることは避けるべきである。

第2問 試行問題のねらいとして「友人、家族、学校生活などの身の回りの事柄に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読んで、イラストや写真などを参考にしながら、概要や要点を捉えたり、推測したり、情報を事実と意見に整理することができる」点が挙げられていたが、情報を「事実」と「意見」に整理する問題で「意見」を問う問題は1問増えて2問に、「事実」（“fact”）を直接問う問題が2問あったが今年にはなくなった。

A 複数の情報を読み取り総合的に判断して正答を導き出す問題である。昨年のこの問題ではデータとコメントと評価のそれぞれ関連性がある3つの情報を正確に読み取り、ねらいの違う5つの問いに答えることが要求され、受験者にとっては細心の注意を必要とする問題であったが、今年は情報がコンパクトに1つのウェブサイトにもまとめられ、非常に分かりやすく改善されたと受け止めている。問4では“One advantage of the hotel the reviews do not mention is the 9.”という問題文で条件に合わない選択肢を選ぶ問いが新たに加わった。

B 昨年は夏の講習の案内と受講者の評価を読み、その内容や「事実」、「意見」に関する問いに答える問題であった。今年はクラスで行われるディベートの準備をするためにある記事を読んで問いに答える問題になった。英文全体が非常によく構成されており、受験者にとって「事実」と「意見」の区別が分かりやすく、改善が進んだという印象を受けた。

第3問 平易な英語で書かれた英国出身の先生のブログと“an interesting article about dogs in the UK”の英文を読み、書かれている内容の概要に関する問いに答える問題である。

A 昨年は遊園地の見取り図がイラストで分かりやすくまとめられていたが、今年はスケジュールに掲載したカレンダーが添えられており、出題上の工夫がうかがえる。解答に迷うことがない問題である。しかし、本文は短い英文なので問いの数が少なく設定されていることは分かるが、本試験と同様、わずか2問しかなかったことには残念な印象を受ける。

B 試行問題の小問1の概要に「雑誌の記事を読んで、概要（登場人物の気持ちの変化）を把握する」とあり「気持ちの変化」に関する問題に対して選択肢が6つも設定されていたが、昨年の試験から本文に出てくる事実を時系列に並べる問いになり、取り組みやすい問題となった。問3は思考力を測る問題であり、今後このような問いが増えることが予想される。

第4問 試行問題のねらいには「生徒の読書習慣について書かれた記事の読み取りを通じて、記事やグラフから、書き手の意図を把握する力や必要な情報を得る力を問う」とあり、記事の数は2つで1つの記事にグラフが1つ添付されていた。昨年の試験では2つのemailと2つの図表、更にプレゼンテーション用のアウトラインの合計5つの情報や図表が複雑に絡み合う問いが出題され、受験者にとっては注意力を要する問題であった。実用的な英文を読み、書き手の意図を把握する力や必要な情報を得る力を問う問題であることには間違いはないが、情報が多すぎる印象を受けた。しかし、今年は簡単な比較表が付いたメールや“Your notes for Tom’s schedule”の表が添えられ、受験者にとって解きやすい問題に改善されたとと思われる。語彙レベルの高い表現もなく、受験者にとって非常に分かりやすい英文で、特に問題はない。

第5問 試行問題のねらいには「ポスタープレゼンテーションのための準備をする場面で、アメリカにおけるジャーナリズムに変革を起こした人物に関する物語の読み取りを通じて、物語の概要を把握する力を問う」とあり、小問が4つあった。昨年の試験では、プレゼンテーション

に取り上げるテーマとして、存命中であればインタビューを試みたかったある写真家の生涯を中心にした物語の概要を把握するための小問が5つ設定されていた。今年はある歴史上の人物に関する英文を読み、出来事が起きた順に本文の内容を整序する問いを含めて昨年と同じく合計5問が出題された。試行問題の問2と問4の問題文に、“Choose the best statement(s) to complete the poster. (You may choose more than one option.)”とあり、選択肢が6つも設定されていたが、昨年と今年の試験ではそれが改善され、「選択肢を2つ以上選択してもよい」という問いがなくなった。受験者にとっては安心して問題を解くことができるようになり、時間を節約することもできたのではないかと思われる。

第6問 試行問題で主に問いたい資質・能力の思考力・判断力・表現力等に「身近な話題や馴染みのある社会的な話題に関する記事やレポート、資料などを読んで概要や要点を把握したり、情報を整理したりすることができる。また、文章の論理展開を把握したり、要約することができる。」と記述があった。問題Aでは“False Memories”というタイトルの記事を読み、その内容を“summary notes”にまとめる問題が出題され、問題Bでは“A Brief History of Units of Length”という題名の英文を読みプレゼンテーション用のポスターを完成させる問いが出題された。いずれの主題も受験者にとって身近な話題であり興味関心を引く内容であったと思われる。

A 本文を理解する上で文中に語彙レベルの高い表現は見受けられないが、“First Interview”と“Second Interview”の形態は受験者にとってやや分かりにくい構成であったことが予想される。対話文の形式に問題はなく、インタビューの臨場感が伝わってくる対話文であるが、“missing words”つまり、“...”が多用されており発話内容や状況を把握するのに時間がかかったのではないかと思われる。また、筆者のコメントがカッコの中に添えられており、本文中にauthor’s comments by“().”と説明があるが、このような構成に初めて触れる学生もいたのではないかと思われる。このような表記方法で出題することはやむを得ないのかもしれないが、もう少し工夫ができたのではないかと思われる。

B 本文中に高いレベルの語彙が散見されることもなく、英文を読み取る上で問題になるようなことはない。また、本試験のように“presentation poster draft”の中でType4以下の情報が省略されているというようなこともなく、本文全体の内容が一見して分かりやすい“presentation poster draft”としてまとめられており、特に問題はない。問1は“Which of the following should you not include?”という問題文で、第2問Aの問4と同じく条件に合わない選択肢を選ぶ問いが新たに加わった。

3 ま と め

本稿では2022年度（令和4年度）共通テスト「英語（リーディング）」問題（追試験）について検討してきた。前述にもある通り、センター試験と比較すると大問構成は6問で変化はなかったが、英語の総語数が大幅に増加し、複数の英文や図表で構成される問題が増え、これまで以上に複雑な問題を解く英語リーディングの問題に大きく変化した。タイトルどおり、英語の「リーディング」の問題であるから、英文法や作文、発音に関する問題がなくなったことは当然のことであろうが、その結果、共通テストでは英語の4技能のうち主に2つの技能（リーディング、リスニング）を計測することにとどまることになる。昨年は新型コロナウイルスの影響を受けて個別試験を実施しなかった大学では、主に共通テストを利用して合否を判定したが、過去のセンター試験であれば、4技能のうち少なくとも3つの技能を測ることができたのではないかと思われる。緊急事態宣言が出された中、やむを得ない選択ではあったが、結果として偏った技能測定を余儀なくされたことになったと判断している。

4 今後の共通テストへの要望

以下は大胆な提案であるが、将来は英語リーディング試験をリーディングとライティングの2つの技能を測定する試験に、英語リスニング試験をリスニングとスピーキングを測定する試験に変更していくことを検討していただきたい。後者のスピーキングテストについては、学校現場でタブレットを利用した試験を毎年実施しており、これまでに特に大きな問題はなかった。AI技術を利用すれば短期間で採点することも可能であろう。AIを活用した音声採点システムの開発は進んでおり、複数のシステムを組み合わせることで偏りを排した採点が可能となるのではないだろうか。他の3つの技能の測定については、従来の方法に従い問題の構成を変えるだけで可能になる。外部試験の利用は評価基準が複数になり、異なる試験を同一の入学試験に利用することは公平性を担保する上で大きな問題となるが、共通テストで評価を一本化すれば全ての問題が解決されることは間違いないと判断する。

また、共通テストの得点については、少なくとも国公立大学への出願開始前に受験者に開示していただくことを強く要望したい。受験者は試験中に自らの解答を問題冊子に記録し、試験後は自己採点を行い、そのデータを基に出願の作業に取りかかる。中には解答を転記し損ね、答案を再現する学生もいる。試験時間が足りない上に自分の解答を転記して、決して完全とはいえぬ自己採点を基に次の個別試験に向けて出願をすることは非常に負担が大きく酷なことだと思われる。得点を開示するまでにとつてもない時間を要することは想像できるが、あらゆることを合理化して何とか実現していただきたい。